

多田政一博士の著書から (81・82) 詳細版

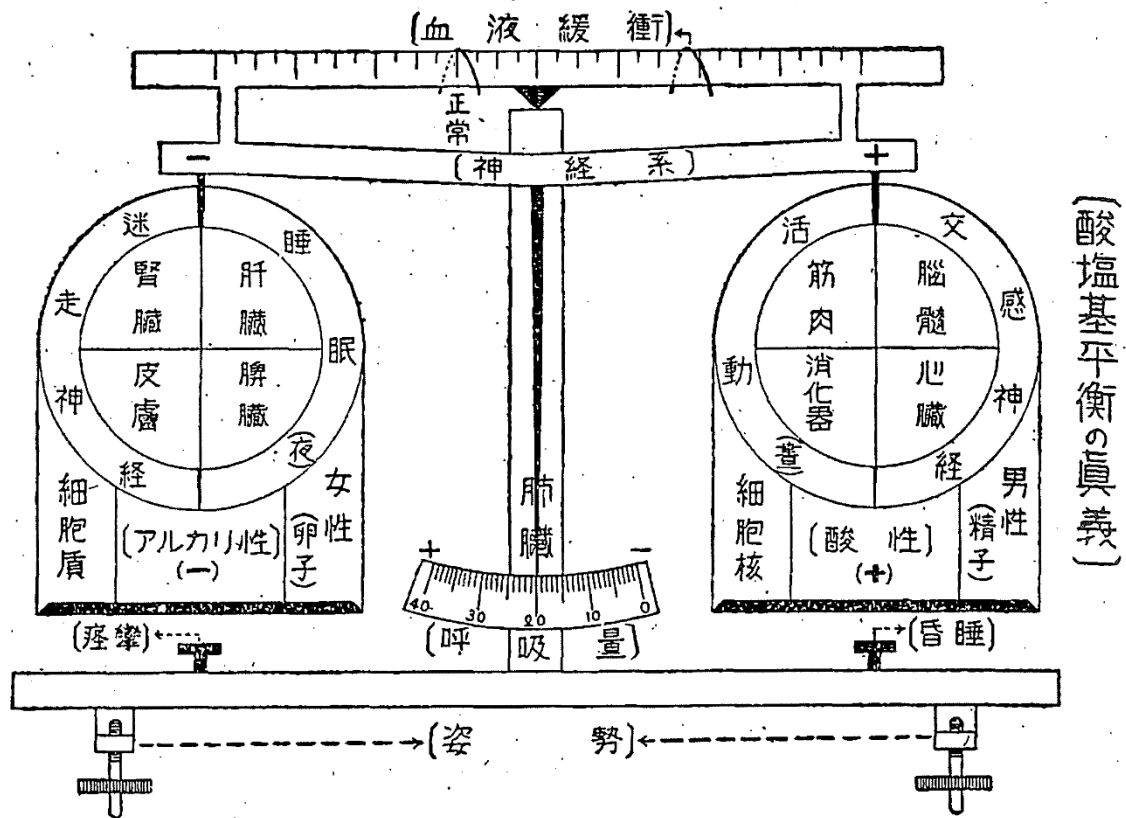
ぜんたいてき さんえんきへいこうろん てんびんず  
全體的、酸鹽基平衡論 (天秤圖説論)

(血液の酸、鹽基、平衡について②)

理事 田中敏彦氏選

1935年 (昭和10年) 刊行『綜統醫學提唱論』より

《本文》



さんえんきへいこうがく ぜんたい  
酸鹽基平衡學は「全體上の平衡」による中和相を現成<sup>※1</sup>する事が醫術その物の目的に他ならない。そこでこの全體的關係を一目瞭然として全體性を掴ますための便宜上に余は次の

天秤圖（上図）を提供したい。

即ち吾人等は早期に目ざめて潑刺たる頭腦を以って一日の計を樹て\*2、正しい朝食に前線張りながらむづがゆい筋肉、踊る心臓をかかへて一步を踏み出した瞬間から晝間\*3の生活はすべてが酸生成的滅盡\*4の過程であり、男性的活動の世界であらう。かうした活躍こそは交換神經的鬭争であり酸化過程のクライマックスに他ならない。

故に双極説に論を借りれば「細胞核」その物の主役舞臺であらう。

男性それがかくした酸の世界に使命を持つ事は次項に譲られるであらう。

さてここでは平衡圖の右皿を眺められれば上述の如き因子が手際よく配列されてをる事が一目瞭然になる。

所で一方の皿に目を移すならば酸皿に對してアルカリ皿が具現されている。

既述の如きエールリッヒの實驗に端を發して明かなる如く肝臟、腎臟、脾臟、皮膚、と云ふは實に血液のアチドーヂスをよりよく防禦せんと、何時も調節的に働くアルカリ的細胞質優勢の細胞群により形成される器官に他ならない。

各々詳説すれば、肝臟は血中に生じたる不揮發性酸を中和してアルカリに變じ酸鹽基平衡の保持に全力を上げる事著大にして、又腎臟は申す迄もなく、酸性尿の排泄によってアンモニヤ物質生成排泄をも司り以ってよりよきアチドーヂスへの防禦者であらう。

一方皮膚はデポト靜脈叢として、同時に酸性の汗を分泌して以って過剰なる酸生成に對して調和的に働き、又脾臟は血球數の増減と並行的に血中カリウム含有量を増減し一方反對的に血中カルシウムを消長せしめる、即ち脾臟收縮時に於ける血液の中和性に對する作用は、カリウムのたゞであり換言せば迷走神經的である事は明かにアルカリ性調整者たる事を物語るであらう。カルシウムそれは交感神經的である事等はイオン平衡論を参照しても明かであらう。

さてかうした酸生成器官の活躍の反面へこれを中和排泄せんとするアルカリ性器官群これこそは對稱的存在であり、前者が晝間を以って主役とする時最も重荷に悩むは反面の眞理たる後者である事を忘れてはならない。

さればアルカリ群は睡眠を以って酸群の低調時に一舉に中和性を潑揮して、遂に早朝には酸を征服して「アルカリ性來潮尿」を現出する事は證明の山積する所である。

換言すれば起立生活それは酸生活であり、臥床生活それはアルカリ生活である。

故に容易に分る如く、盜汗\*5 それこそ酸鹽基平衡を回復せんとするアルカリ性器官皮膚の全力相に他ならない。

ここでもはや贅言\*6 を要するまでもなく、かうした酸とアルカリとの全體上の中和それ

を連繼的に表象される物は天秤上の「血液」であり、この血液自體にまで最も陥り※7 易き、アチドーゼスへの緩衝能の鐵條網※8の張り廻らされている事は前章の如くである。これを更に報導し、酸とアルカリ群との間の電位を以って傳へて調和を易々たらしめる物それこそは「神経系」に他ならない。かうした一方不揮發性の酸に對して豫備アルカリを提供して以って、その増減を調整する肺呼吸こそは、兩者の中間に立って自在なるガス性調和を以って全身平衡の中和性を保証しているに他ならない。

かく觀じ來れば醫術それは「全體上の中和」「肉體上の中和」「精神生活上の中庸道」その物の上に立脚する物であり、單なる局所上の失調の回復ではない局所上の回復が全體上の中和を破るならそれこそは『角を矯めて牛を殺す』であろう。かうした事實が醫界に山積する事こそ醫業不振の根本原因に他ならないと絶叫する者である。

若しかうして酸皿の中和をアルカリ皿が果さずんば遂に血液の緩衝能を突破して忽ち臨床上の「昏睡」を引き起し反對にアルカリの過剰にすぐれば「痙攣」が襲って來るであらう。

彼の臨終に際しての昏睡と痙攣との交互的去來ここに全體上の平衡が著しく動揺して來ると、忽ち死が訪れる死こそは「最後の中和」である。さればこそ神道は「中神」を教へ佛道も亦「中道」に現生し儒學又「中庸」を説くのであらう。

さてここで諸君はまたアルカリ的器官は各が初篇循環篇中のデポト器官と分明せし物のすべてを含んでいる事を忘れてはならない。循環上の全體的調整は酸鹽基上の調和ともなる所、即ち全體觀は禪門の所謂「隨所に主と作る※9」事を味ひたい。

世に治病を求め保健を論ずる人は山積する然しこれが「皇道精神上の醫術」によつてのみ達し得る不二門であり、且つ喧唱される日本精神の建設は健全なる肉體と不即不離なることに氣づいている人その者が餘りにも少ない。

少くとも氣づいてはいても『實體化』の方法奈邊※10にあるやを論ずる科學者は幾人あるであらうか？

正に求むる物、それは西洋の科學者でなく「日本の科學者」その物である。『日本の』とは申すまでもなく、『全體』を掴まんとするの謂※11である。

## 《語句説明》

※1 現成（げんじょう）：眼前に隠れることなく、ありのまま現れていること。

※2 計を樹てる：計を立てる

※3 晝間（ひるま）：昼間のこと

※4 滅盡（めつじん）：【滅尽】ほろんでなくなること。また、ことごとくほろぼすこと。

※5 盜汗（とうかん）：寝汗のこと

※6 贅言（ぜいげん）：むだなことを言うこと。

※7 陥（おちい）る：陥

※8 鐵條網：鉄条網

※9 「随所に主と作る」：その場その場で主人公となれば、おのれの在り場所はみな真実の場となる 例：随处作主（ずいしょさくしゅ）

※10 奈邊（なへん）：奈辺「どの辺」、「どの点」、「どこ」の漢語的表現。

※11 謂（いわれ）：理由

## 解説

### 《所感》

今回は重要な天秤図（1 ページ目の図参照）があります。これは、酸塩基平衡論の全体性を掴むのに最適な図だと思います。現代医学の大きな欠陥<sup>けっかん</sup>である対症療法（局所観）から脱<sup>だつ</sup>して、生体の絶妙なるバランスを全体観<sup>なご</sup>で眺めてみてください。まさに生命の神秘が見えてくることでしょう。

多田博士は、『全体上の平衡』と言うことをよく言われています。これは肉体のみでなく精神上においても言えることですが、特に今回は肉体において『全体上の平衡論（天秤図説論）』の重要性を天秤の図を用いることでわかりやすく解説しておられます。

この図をよく見てください。

医術の目的である中和相（カラダのバランス）を成すためにはどうしたらよいのか、その原理が一目瞭然でわかります。

ここで言われる『酸塩基平衡』とは、全体上の平衡を考えることでなされるものであり、それは多田博士の考案された天秤図を見れば一目瞭然ですね。

平衡図の右皿は酸皿であり、そこには脳をはじめとして、心臓・筋肉・消化器があります。

ここで知らねばならないのは、昼間は酸を生成する生活であり、交感神経優位で酸化的なものです。

対照的に夜の生活は副交感神経優位であり、肝臓・腎臓・脾臓・皮膚の出番なのです。

人間の体は、なんでも行き過ぎてバランスが崩れてしまわないようにするシステムが常時働いています。この機能をホメオスタシスと言います。このシステムが十分機能しなくな

ると病気になります。

厳密に定義すると、ホメオスタシスとは、「外界がたえず変化していたとしても、体内の状態(体温・血液量・血液成分など)を一定に維持できる能力のこと」なのです。ホメオスタシスと言っても、全く変化しないのではなく、ある一定の範囲を変動しながらも平衡状態を保っているということです。

ホメオスタシスを維持するためのプログラミングは脳にあります。そして脳の視床下部が自律神経の調整をしているため、ホメオスタシスのはたらきが崩れると、天秤図の左右のバランスが崩れ、交感神経と副交感神経の切り替えがうまくいかなくなります。すると様々な病気を発症する原因となってしまいます。

医術は「全体上の中和」「肉体上の中和」「精神生活上の中庸道」の上に立脚するものであって、単なる局所上の失調の回復ではないと言うことを肝に命じるべきです。

多田博士は、局所上の回復が全体上の中和を破ると言う事実が医学界に山積する事こそが、医業不振の根本原因に他ならないと絶叫されています。臨床医としては耳の痛い話ではないでしょうか？

また多田博士が、『まさに求めるのは「全体」をつかもうとする科学者だ』と言うのは、現代においてなお一貫したことでしょう。